

裸

勇気を絞って

鎧を脱ぎ捨てると

からだは　こんなにも蠢くのだ

ぐにやぐにやと動く腕や脚は

春を知った子熊のように活発なのだ

まるで私の意思など

聞こえてすらいないかのように

……私は愚かにも

矯正しようと企んでいたのだろうか

こんなにも愛らしく　かけがえのないはずの

そういう美しさを宿しているはずの

わたしのかたちを……

さあ

もう鎧はない

閉じ込めるものがなくなったが

守ってくれるものも　なくなった

わたしは裸のつま先で

ようやくと　目の前の大地に

じかに触れようとしているのだ